

したが、終生忘れることなく子々孫々に語り伝えたく思っている。

昭和二十一年五月、中国から引き揚げ、船は米軍の上陸用舟艇LSTで、入港したのは佐世保の針尾島埠頭でした。日本全国の荒廃した街も山河も、いや人心までも無味乾燥して人間味を失っていました。すべて戦争のもたらした罪科である。昔のように心豊かな人間の日本人を取り返してほしいと願うのは、私一人に非ずと信じます。

八十歳の今日まで生きてきました。

少しでも世のため人のためと、これからも残余の生命を尽くしたいと思っている今日この頃です。

なお、復員時のよれよれの襤褸軍服を身に纏っていましたが、胸には衛生兵表示の緑の山形の胸章を付けていました。戦没者の御霊の泰きを念じます。

## マラリアと禍福

山形県 手塚省 三

私は、大正十一（一九二二）年九月七日、山形県西置賜郡飯豊町黒沢で生まれました。農家の三男です。父も兄も弟（私が入営した後海軍へ志願）も一家揃って、国家のため軍務に努め、日本男子として誇りをもっていました。私は昭和十七（一九四二）年十二月一日、山形の歩兵部隊へ入営しました。その当時の私の家の情況は、次のようでした。

父 健在 農業

（水田 一町歩、畑 二反歩、

山林 一反歩、原野 二反歩）

母 健在

兄（長男） 健在 出征中

兄（二男） 若死

本人（三男） 健在 農業

弟（四男） 健在 が入営後海軍へ志願入隊  
妹（二人） 健在 学生

私は昭和十七年度の徴兵検査で見事、甲種合格となり、誇りある日本男子となりました。

昭和十七年十二月一日、北部第十八部隊（山形歩兵第三十二連隊）へ雪第三五二五部隊要員として、同じ村よりの六人と共に入隊しました。

昭和十六年十二月八日、日本海軍航空隊によるハワイ真珠湾攻撃より、大東亜戦争の各戦線で連戦連勝の破竹の勢いであったのは、私達の入営の以前のことでありました。私達が入隊し、未だ隊内の事は西も東も判らない八日の未明、非常召集のラッパの合図で営庭に整列、入隊したばかりの私達新兵には予期しないことでしたが、なんとか同年兵の新兵仲間と一緒に行動ができてホッとなりました。

十二月も残り少なくなつた頃、私達は兵営を出て山形駅へと行進しました。駅の付近は暗くて大

勢の人で混雑していました。大陸から初年兵受領のために来ていた下士官に引率されて列車に乗り込みました。列車の窓から外を眺めても外は真つ暗で、列車がいまどこを走っているのか分からないう。列車は停車することもなく、東海道線もあつと言う間に走破し、当時としては翌日早く、山口県下関へ到着しました。下関を出港するまでは市内の大きい広い家に宿泊させて貰い、二、三日後に名残を惜しんで乗船しました。

十二月の朝鮮海峡は波が高く、初めて輸送船に乗った私達は、あの船酔いの辛かったことには、もう話のしようがありません。八時間位で海峡を通過、釜山に上陸、初めて眺める車窓からの風景は、山という山はすべて裸山で、日本内地の山の緑の多いのとは大違いで驚きました。

朝鮮半島を通過して満州国へ入り、奉天より支那大陸へ入り、南へと進みました。山海関及び石家荘を通り山西省セイカ鎮で下車、当時、松山部隊の連隊本部のあつた澤州へ徒步行軍しました。

途中、ある集落へ入るとニンニクの臭いが漂っており、あの臭いには胸が悪くなるようでした。

セイカ鎮から澤州まで何里あったのか不明ですが、連隊本部の松山部隊に無事到着しました。澤州城外で同じ生まれ故郷の先輩に「頑張れよ」と肩をたたかれ、とても勇気づけられました。

旅団本部の高平で松山部隊の初年兵教育を受けることになり、私は第十二中隊に編入され中隊兵舎に入りました。初年兵教育の班長と、初年兵を世話してくれる二年兵は一選抜の上等兵で、班付きとして私達の教育並びに身の廻りのことを世話してくれる。家庭であれば、班長は父親、班付上等兵は母親のようなもので、何事も相談できる良き上官でした。

初年兵を初めて迎えたお祝いに、赤飯を御馳走してくれたのかと思っただけですが、高粱飯で、口の中でもぐもぐするばかりで飲み込むのは容易ではありませんでした。

翌日から教育が始まりました。故郷の青年学校の教育とは異なりましたが、それでも同じ戦友の中でも青年学校を出ていない者より大分助かりました。

私は十一年式軽機関銃班に編入されました。二月の大陸気候は寒さが厳しく、隊内へ帰隊するには必ず駆け足で軍歌を歌って帰隊しました。班内に帰って見れば、整理棚に整頓しておいた物は寝台の上にひっくり返されています。昼食前に整頓し直すのですが、皆と一緒に食事をするのは大変でした。

そうした事は度々ありました。また初年兵は、順番制で当番となり、炊事場よりの飯上げ、食缶の返納などをやります。食缶の返納で容器に飯粒等ついていると、炊事係古兵より物も言わずビンタを喰いました。

午後の訓練では、各班ごとに行われ、我々軽機班は軽機の操作説明、点検など、事細かく仕込ま

れ、一日も早く前線へ出られるように何回も繰り返し  
返しの連続訓練でした。一日の訓練も終わり帰隊  
して、班長や班内の古兵の上げ膳、下げ膳が終わ  
れば、兵器の手入れ、点検と休憩時間もありませ  
ん。僅かな自由時間で故郷へ便りを書きます。久  
しぶりに故郷から来た便りを何回も目を通しまし  
た。

朝六時、夜九時の起床、消灯はラッパの合図で、  
これで一日の日課が始まり、終わります。こうし  
て毎日の日課を過ごしつつ、早くも一期の検閲で  
一等兵の星を着けました。直ちに中隊本部へ行き  
ました。

高平より陽城へ復帰し途中八路軍の秘密軍に遇  
いましたが、無事に城内に入る事ができました。

陽城周辺も昼夜の区別なく敵軍が近づいている  
との情報が入り、その都度に討伐に出動しました。

七月の半ば、山西省、河南省にまたがる太行山  
脈の大作戦へ参加しました。私達の分隊は、初  
年兵三人、分隊長はじめ古兵と一分隊十五人位だ

ったと思います。険しい山岳地帯のため我が軍も  
敵軍も苦戦で、苦勞しましたが犠牲者が極く少な  
くて済みました。

私は軽機の助手のため、射手の食糧、弾薬を携  
帯し射手と共に行動しなければなりません。日  
日が暮れると戦闘も止み、野営のため天幕で仮宿  
舎を造ります。また初年兵三人で食事の準備に、  
古年兵の食事の準備です。野生のカボチャの葉つ  
ば、茎、アカザの葉っぱ等を、懐中電灯を頼りに  
して採り、携帯味噌、米ぬかのイワシ等での夕食  
です。食事が終わると明日の行動の準備をして、  
歩哨に出ます。初年兵が少ないので古年兵より厳  
しく指導を受けましたが、三人で力を合わせ我慢  
をしました。

大陸に雨季が来ました。雨が降り始めると、忽  
ち道路は川幅の広い川となり、横切るにも容易で  
はありません。気温が上昇するため草むらや林の  
中には蚊や蠅が驚く程多く、特に大陸の蚊は日本

のしま蚊の二倍近く大きく、マラリア菌を持って  
いる嫌な蚊で、水溜りには、この幼虫のボウフラ  
が水面いっぱいいます。その蚊に刺されるとマ  
ラリア病という熱病に罹り恐ろしい。

強行軍で水筒が空になり、道ばたの湧き水を飲  
み、しばらくすると下痢が始まる。四十五分行軍  
して十五分休憩であるが、休憩まで我慢に我慢を  
して、その十五分間に用をすませる事は並大抵の  
ことではなかったのです。僅かな休憩も終わって  
また出発となる。

支那人の耕作しているトウキビを無断で採り、  
行軍しながら生で嚙り、四十五分行軍、十五分休  
憩の連続で疲労困憊でした。今静かに当時のこと  
を振り返ればよくもまあ頑張ったものだと思いま  
す。作戦も敵が手薄であったので私達の損害も無  
く、中隊へ帰り、お互いに残留部隊の上官はじめ、  
同年兵や戦友と再会ができて共に喜び合ったもの  
です。

その後も中隊勤務をしましたが、作戦時の疲労

とマラリア熱発により中隊医務室の検査により、  
中隊医務室へ入室となりました。軍医は懸命に治  
療して下さったが、マラリア病の回復もよくなり  
発熱が長引き、高平の野戦病院へ後送されました。  
病院では検査と治療でベッド生活となり、昭和十  
八年十月、雪兵団は南方への移動が始まりました。  
私は残念にも病院のベッドの上から進軍ラップ  
を先頭に部隊が行進する勇姿を見て、私は不甲斐  
無い白衣姿、悔し涙と自分の惨めさを感じて感無  
量でした。

昭和十八年の十二月、更に大原の陸軍病院へ後  
送されました。当時の陸軍病院ともなれば、佐官  
級の軍医さんはじめ多くの軍医さんや治療機械器  
具が揃っており、毎日かかすことなく治療診療し  
て貰いました。体重が作戦前には六二キロ以上の  
ものが、マラリアと内臓疾患のため四四キロに減  
り、筋肉も痩せ衰え、階段の登り降りも容易では  
なかったのですが、少しずつ体力が回復し、自分

でも好転しているのが判り、食事も健康人と同じ位食べられるようになりました。

昭和十九年正月を病院で迎えて、正月三日には餅がとても美味しかった。

一月末に退院を命ぜられ、同時に退院した約十人は、勝第八十五大隊へ転属となり、輸送の関係で数日間兵站で宿泊しました。汾陽の西の離石かと思う地点で、勝第八十五大隊第三中隊「中村隊」へ入隊しました。

同大隊に私の兄がいて、初年兵受領に行き内地から部隊へ帰ったばかりで、故郷より何百里も離れた戦地で肉親と再会できるとは考えもしませんでした。ただ懐かしく話も十分できませんでした。

二月、雪部隊より勝部隊へ転属した隊員は、再び壘第一四七四部隊への転属命令が出ました。

八日、私は技術下士官候補者として河北省天津兵器廠に入校しました。ここに入校したのは北支、中支より選抜された一二〇〇〜一三〇〇人と思います。私は教育隊の第二内務班へ、班長は暁部隊「静岡」

より配属された佐藤軍曹で、入校した数日間は親切丁寧で、初年兵で入隊した当時とは違うものでした。その後は起床前に竹刀を持って教育隊広場に来て、隊員の整列を待ち、少しでも遅い者には遠慮なく竹刀で腰を叩きつけました。これは班長の厳しい教育でしたが、各方面から選抜されて来た隊員は一口も不平を言わず、ただ我慢を通しました。

班長は隊員を集め「班長の言葉は陛下の教育と思え、お前達は原隊へ復帰すれば、立派な下士官で、現在は下士官の卵である。班長は皆が学校を卒業するまでは厳しく指導をする」と。隊員は日中は北京の兵器、弾薬の各廠での兵器実習並びに講習など短期間の教育で大変でした。

天津より北京までは、そう遠くないように思え、あの雄大な万里の長城もかすかに見えました。日曜日以外は、この実習と講習に通いました。こうして短期間の教育も無事に終了して原隊に復帰しました。

満州より壘部隊へ陸軍少佐村田弥蔵部隊長が転属して来て就任しました。私は中隊より本部付になりました。直ちに再編成された本部隊員約三十人を上田少尉が引率して河南省許昌県許昌へ行き、許昌周辺の警備のために各部隊より第五十三大隊へ補強、転入させました。部隊は、五個中隊と銃砲隊と本部との構成でした。

河南省は山西省より気候も良く、作物も豊富でした。戦況は北から南へと部隊の大移動ですが、下っ端の私達には部隊の状況など確かめることもできず、私達は部隊が編成されると間もなく、討伐作戦へ出動しました。私は本部の留守隊員として残りました。留守隊は許昌周辺の警備のためです。

その頃状況も日増しに悪化し、今までは空からの攻撃など受けたこともなかったのですが、敵の部隊の上空からの攻撃回数も多くなり、空中では打つ手も無く、ただもう勝つまではと歯をくいしばり、必ずや神風が吹くものと信じていました。

今思えば、アホラシイことでした。

最後に我々の部隊に補充されて来た兵隊は、大阪から来た兵隊で、本当にお粗末な装備で、銃は二人に一丁、飯盒は竹行李、水筒は孟宗竹、帯剣は木製、軍靴は地下足袋で、全くお粗末極まるものでした。

八月十五日の天皇陛下の放送は、未だに私達は知らず、放送があった二、三日後、部隊長が留守部隊全員を営庭に集めて「陛下の録音が無線で連絡があった」と報告がありました。部隊長も動揺したのであるう、部隊長は「私を信じ最後まで私と共に行動してくれ」とのみでした。隊員一同も、ただ呆然とするのみで、中国戦線では負けてはいない、最後の一兵まで戦うと思いました。また日本全国民は、この無条件降伏を聞いて、どんな気持ちになったことでしょう。

討伐作戦に参加した隊員も部隊へ帰り、部隊長は力なく留守隊員に訓示したのと同様の話をされ

ました。日が経つにつれ、近く日本に帰れる、また日本へ帰れないで労働に使われる等いろいろなデマが飛び、上官は動揺する隊員の心を静めるべく努力しました。

九月半ばとなり、蒋介石軍より武装解除の通達が入り、僅かな兵器を残して全部提出、返納と決定されました。私は兵器係将校と共に提出、返納の日まで、徹夜の仕事で、必ず提出、返納できるように頑張りました。兵器を車で運び、かつては菊のご紋章が付いていた、並べられた小銃の上を歩きながら数を確認することは、涙が出て止まりませんでした。兵器の提出、返納事務も無事終わり、兵器係将校と共に責任を果たすことができ安心しました。

長期戦に備えた鄭州の糧秣倉庫へも糧秣受領に行きました。食糧も比較的多くなり、戦中の栄養よりも良く、元気で過ごすことができました。

昭和二十一年四月、許昌より復員のため、河南

省の主要都市である鄭州に集合の指示がありました。各地より部隊がぞくぞくと鄭州に集まり、逆に鄭州より立ち去る部隊もあり、鄭州駅周辺は混乱状態でした。

私は北海道出身の佐々木准尉と第五十三大隊の先発として外の部隊と一緒に無蓋の貨物列車に乗りました。四月初旬はまだまだ寒く、毛布や外套で寒さを防ぎ、「徐州、徐州と人馬は進む」と言う軍歌で有名な徐州へ向かいました。一日中走り通しても列車はまだ麦畑の中を走っているという、その広大さに驚きました。上海までの距離も遠く、途中列車が止まると地域住民が、日本人の引揚者を目掛けて石や物を投げます。列車が上海へ到着するまで、石や物が当たらないように気を使っていました。我々が鄭州を出発する前にはこうした仕打ちは無かったものです。

やっと上海へ着きました。上海とは言え、まだ上海港の手前で、その地名はハッキリとは覚えていません。第五十三大隊が到着前と到着後に、

准尉殿と命令受領に行った場所は、約二キロ位離れた所にあり、徒歩で行きました。その途中で、支那人が仲間数人で私達の貴重品を奪い合うのに、命令受領で通る度に出会いましたが、何とか難を逃れる事ができてホッとしました。

第五十三大隊本部の各種の重要任務も無事に責任を果たし、准尉殿に助けられて感謝でいっぱいでした。上海より乗船するまで、何回となく蔣介石軍の検査があり、検査官の後から下端の兵隊が隙を見て、貴重品を狙い盗む姿は、まるで猫がネズミを取るより早いものでした。彼らが欲しがるのは時計、万年筆、財布などで、日本人の持ち物は何でも手当たり次第で、私も乗船直前の検査で時計を取られました。

上海より乗船して、河と思ったら揚子江（長江）で、海も河も区別がつきません。揚子江の水は黄色い水、太平洋の潮水は青々と、ペンキで線を引いたようで、揚子江の河幅には驚きました。部隊

全員が乗船し、部隊長は全員の前で「永い間苦楽を共にして、やっと全員一人の脱落者もなく、日本内地の土を踏むことが出来るのも、もう数日である。それまでは上下の階級秩序を守るように」と頭を下げ訓示をされました。

乗船中は何事もなく、長崎県佐世保へ上陸。生きて無事祖国の土を踏めたことを、戦友とお互いに喜び合いました。

上陸すると米軍のいろいろな検査、消毒がありました。それをすべて無事終わり、東北、北海道、関東北部の隊員と上野で別れを告げて各自の家族に向かつて散って行きました。

私は無事元気で復員して故郷へ帰りましたが、忘れてはならない大事な事があります。

私がマラリアになって、高平の野戦病院へ入院して闘病生活の最中、昭和十八年十月、私の母隊の雪兵団が南方へ移動しました。聞けば雪兵団は遠く南のニューギニアの天地に参戦し、将兵の大部分を失ったと聞きます。

古い支那の言葉に「天道是非か？」とあります。私はマラリアにかかり入院すると言う落伍兵となり、母隊の兵団の南方行きを、涙を流しながら見送り、我が身の不甲斐無さを嘆きました。東北の健児として勇猛ぶりを謳われた雪兵団の親しい戦友の大部分をニューギニアの魔境に散華させられたこの無念さ！

健兵は英霊と化し、病者は復員家郷に還る。題して「マラリアと禍福」と題する所以です。

復員後、結婚は昭和二十三年四月十六日。妻は元気で、子供は一男二女に恵まれました。孫は五人います。

私は、戦後、次のような地域での役職を務めて来ました。

部落の区長、生産組合長、PTA役員、

神社、寺の総代、老人会役員、

恩欠連の地区役員

全国の恩欠連会員の皆様のご健勝とご多幸をお

祈りいたします。

最後にニューギニアに散った雪兵団の英霊各位のご冥福を謹んでお祈りします。私の武運長久を感謝します。